

## 令和4年度第1回射水市ひきこもり支援推進協議会 会議録

日 時 令和5年3月27日（月）  
午後1時30分～午後3時  
場 所 救急薬品市民交流プラザ

### 1 開会

### 2 あいさつ

### 3 議題

- (1) 令和4年度射水市ひきこもり支援対策事業の取組状況
- (2) 令和5年度射水市ひきこもり支援対策事業

#### 【質疑応答】

会 長： 資料1の2ページの当事者の性別は、本人なのか、相談に来られた方なのか？

事 務 局 相談に来られた方の性別である。

会 長 資料1の2ページの主な相談内容では、家族関係の問題が増えている。どのような具体的な相談があったのか、事例を紹介してほしい。

委 員 ひきこもりの対処法には3つの視点で考える必要があると思う。「家族」「地域社会」「原因がわからない」の視点のうち、家族の場合が最も対応が困難だと感じている。

具体的には、隣近所に迷惑をかけていた当事者が、地域住民を交えたケア会議から問題点が見えて、更なる支援者が関わり、良い結果を生んできた事例があげられる。

主たる原因は不明だが、学生時代の病的な問題などから、大学を中退し、結果的にはそのまま引きこもりになった場合は、ケア会議で医師など専門職種と関わり、キーパーソンを交えた支援から社会参加できる居場所を見つけていく事例もある。

他には、家族、特に親子関係の場合、最初のかかわりが難しいが、本人との面談を軸に、支援者が居場所を提供し、仲間との交流ができるようになった事例などがある。

パターンごとに色々な形でのかかわり方を行うことで、問題解決の糸口が見えてくると思われる。

取り組みがうまくいった好事例を蓄積し、サポーターの方などへ伝える体制づくりが大切だと思われる。

会長 相談者のうち、新規の方は少ないが継続の方は多い。  
ここで、専門相談会での相談内容について、相談対応をされた方から事例紹介をしてもらいたい。

委員 ひきこもりや不登校は、理由なき不登校、理由なきひきこもりと言われている。  
相談内容を分類できているかが不透明である。  
彼らが持っている理由を私たちが理解できていないのが現状である。  
彼らが持っている課題、悩みを私たちが理解できていないことが大きな壁になっている。  
彼らはコミュニケーション能力がないわけでもなく、社会性を持っていないわけでもない。関係性の問題である。居場所の中で関係性をいかに作れるかが大切である。

対人関係に問題がある場合、コミュニケーション能力がない、社会性が欠如していると判断してしまうのは、上から目線の判断である。  
コミュニケーションができる相手がいらないだけではないか。

ある相談会で対応した方が、すてっぷカフェの家族会へ来られたが、お母さんが一人で悩みを抱え込み、どう対応していいかわからなくなっておられた。

私たちは、ご家族と同じ目線に立ち、共感できるかが相談対応における大事な部分ではないかと思う。私たちのこれまでの相談対応経験を土台に、いかに共感できるかを考えている。共感することから、相談者と娘さんとの関係が変わるちょっとした糸口が見えてくるのではないか。

私たちから指摘するのではなく、私たちとの会話を通して、お母さんが自分の行動を変えてみようとする気づきが娘さんへの対応を変えていくのではないかと思いつつ、相談を受けていた。

サポーター養成講座の「燃え尽きないための自己覚知のポイント」と密接に関係する中身の話だと思う。自分たちがどんな価値感・態度の中で生きているかそういう自分をしっかり意識しようということだ

ろう。

突然会社を辞めた本人の理屈は、私たちの価値観とは合わないから私たちには理解できないこと、相手には相手なりの理屈や社会の価値観を持っていることをまず理解しなければいけない。

「理由がない」というのは、私たちが相手の理由を理解できない、私たちの価値観には入っていないということだと思う。

会 長 今年度新規事業のすてっぷカフェの家族会やひきこもりの勉強会や交流会について、具体的な進捗状況を伺いたい。

また、すてっぷカフェを本人と家族に分けた効果や、サポーターのフォローアップの研修や仲間同士が交流する機会を設けた成果についても伺いたい。

事務局 サポーター勉強会は学習だけでなく、ロールプレイングを取り入れた。ロールプレイングはサポーターだけに任せるのではなく、事務局職員が各場面の当事者、本人、家族、近所の方の役割を演じ、そのとき自分ならどうするか順を追って学んでいただいた。

また、当事者の方にご協力いただき、すてっぷカフェなどのひきこもり支援活動などについてインタビューを行った。会社を辞めた後、すぐに就職できると思っていたがなかなか再就職できず、心が折れてひきこもりに至った経緯や、すてっぷの居場所や相談員の面談が自分の価値観を修復するよりどころになったことなどをまとめたVTRを研修会で紹介し、当事者の思いを聞く機会を設けた。

すてっぷカフェ開催を当事者と家族に分けた理由は、前回の協議会の中で、当事者と家族の問題は別なので、分けて考えてはどうかとのご意見があったからである。家族の心身のリフレッシュも必要だが、中には、当事者の家族がお互いの思いを確認したい、ひきこもりについて勉強する機会を持ちたいというご意見があったため、協議会委員を講師に招き、本人との接し方やアンガーマネジメントなどに関する勉強会を年3回開催した。

勉強会に参加した家族からは、リフレッシュだけでなく、市内でこうした勉強の機会があったことは大変良かったと聞いている。

サポーター勉強会の参加者からは、座学だけでなく、当事者と接するロールプレイングを目で見ることでイメージがわき、自分もでき

るのでないかと自信を持つことができたという意見があった。また、サポーター活動において、支援のプロである有資格者と一緒に行動することはできるが、自分たちだけで活動を行うのはまだまだ不安だとの意見もあった。

会 長 来年度の新規事業としては、市内3地区での出張相談会の開催が計画されている。ワーキング部会の中で、教育分野との連携に関する意見があり、こうした連携は必要だと思うが、委員それぞれの立場から、この協議会の場で改めてご意見を伺いたい。

委 員 食事を数日間とらず、家族とも話をしようとする子どもについて、家族から相談があった。この状態に関する相談について、カウンセラーである私から主治医へ相談できるだろうか？

委 員 主治医は、支援者の方からのひきこもりに関する相談に対応している。ただし、予約のない急な相談は、受付でお断りする場合がある。その際は、受付で相談内容を説明してほしい。  
お子さんが食事をしない理由は本人の理屈であり、周囲が常識的に考えても答えは出ないだろう。

委 員 入院は可能だろうか。

委 員 入院対応がすべての解決になるとは限らない。  
入院が本人にとって不本意な対応となり、そのことが一生本人の心に残る可能性もある。命にかかわることなので、最終的にはそうせざるを得ない場合もあるが、入院はギリギリまで本人には提案せず、対処していくようにしたい。  
食べないと入院になるという発言は、言われた側は脅されていると感じてしまうので、本人と一緒に何とかしていくことを考えたい。  
本人の栄養状態などをみて、命にかかわる場合は入院を勧める。

委 員 ご家族は、私と本人が会ってほしいという思いが強い。  
これからは、相手から相談に来るのを待つだけでなく、本人の同意を得て、アウトリーチ、相手に踏み込んでいくことが大切になっていく。  
そして、家族がひきこもりサポーター養成講座を受けてひきこもりに関する知識をもち、家族が自ら子どもに対応する形をつくっていくほうがいいのではないかと感じている。

まず生きることが大切だが、ひきこもることは社会参加をあきらめた命を縮めている行動の一つだと感じたとき、支援機関同士が連携する体制をとることができればと日ごろから考えている。

委員 ある兄弟から医療機関の受診について相談された際に提案したことだが、直接、精神科を受診することは嫌がると思うので、食事がとれない場合などに精神科以外を受診して、医療機関のソーシャルワーカーやカウンセラーからの支援を求めてみたらどうかと話したことがある。

この方法は、最初はどうも良かったが、自宅で体調が悪化し救急搬送されて苦しい経験をしたことから、医師に不信感をもち、またひきこもってしまった。

本人にコンタクトをとるきっかけは必ずあるので、そのチャンスをどう利用していけばよいか、真剣に考えていかなければならない。

地域の民生委員や兄弟から本人の情報を得て、命だけは助けたいと考えているが、医療につなげていくことはなかなか難しい。

会長 義務教育終了時に不登校の状態のまま卒業した場合、市町村は中学校までしか関わることができない。個人情報のあるところもあるが、その先はどうつないでいったらいいか。

委員 ひきこもりはあくまで状態像であり、その状態像は病気や障がいではないので、もう少し深く考えていかなければいけないのではないかと考えている。

学校を長期間休んでいる子どもたちは義務教育終了後も引きこもっていく可能性が非常に強いのではないかと感じている。

昨年、4月半ばに、3月に中学校を卒業したお子さんが通信制高校に来られた。そのお子さんは、4月1日付での高校入学はなんとかできたが、家庭の様子を見ていると、中学から高校へ入学する過程について、適切な情報提供が学校から行われていないのではないかと感じた。

中学卒業後、つながる先がどこにもなく、ひきこもっていきかねない家庭が多分あると思う。中学卒業後の不登校家庭に対して関心をもって接する部局は、教育委員会から福祉の世界へ移っていくのではないか。そのお子さんの情報や接点接点について、双方で共有することができないだろうか。

県全体で考えると、割と多くの子どもたちが中学を卒業した後、次につながっていないため、ひきこもり状態になりかねない状況が隠さ

れていると感じる。

個々の家庭の考え方にもよるが、教育と福祉との連携があればいいのでは感じている。

会 長 学校の教員は、大学等で地域や福祉との連携を学ぶ機会がない。  
コロナや働き方改革から家庭訪問を行っていない学校も増えており、子どもたちの生活の事態を十分把握できていない学校も多い。学校は、子どもたちの卒業後のことについても、勉強していなければいけない。

学校は、地域にどんなサポート支援機関があるのかを学び、少しでも家庭に伝えることができれば、その中から支援につながる方も出てくると思う。

教員は、授業科目で福祉について学ぶ機会がない。教科の授業の作り方はよく学んでいるが、教育相談やカウンセリングに関しては、基礎知識はあるが、専門的に学んでいるわけではない。

学校にスクールソーシャルワーカーを迎える体制にはなっているが、どんなときに来てもらったらいいいのか、どんな支援をしてもらえるのかわからないので、本人や家族に対して、卒業後の支援に関する情報提供ができていないのではないのか。また、高校に進学をしても退学してしまうケースもある。個人情報の問題はあるが、本人や家庭に必要な情報を届けられるような仕組みを作っていかなければいけないのではないか。

ひきこもり支援事業が定着してきたら、その先は連携が大切だと思う。これまでにうまく連携できた事例があれば紹介してほしい。

委 員 当事者の居場所提供を行う活動団体が開催する親の会には、当事者の親だけでなく、居場所を卒業した子どもの親も来ている。社会へ出ていく子どもに対する不安を抱えている場合、居場所を卒業した現在も子どもとのコンタクトがうまく取れず、関わりの勉強に来られる場合のほか、コミュニケーションをとることができるようになった親が、周りにアドバイスをするために訪れる場合などがある。

多くの人の経験談を聞き、コミュニケーションをとることができる親の居場所を作ること、周りの経験談を聞く場を作ることが大切である。

委 員 誰ひとり取り残さないために、情報を共有できる協力者を地域に増やしていくことが大切だと思う。また、医療が積極的にかかわっていただけるといいと思う。

診断書の作成支援や手帳取得支援など、治療以外にもサポートして  
いくことができればと思う。ひきこもりのなかに病的なものが潜んで  
いる可能性があるので、本人の困りごとを改善できるよう関わりたい。

そして、今後、かかりつけ医と精神科医の連携や自殺関連問題とも  
効率的に関わっていけるようにしたい。

医師へつなぐことに対して敷居が高いと感じている方もいると思  
うが、病院の地域連携室を通じて相談するなど、遠慮なく相談してほ  
しい。これからは連携が大事になる。それぞれの得意分野を最大限に  
生かし合っていくことで負担が少なくなる。各部署で抱えると、その  
部署で燃え尽きてしまうこともある。連絡を取り合う体制をとってい  
くようにしていきたい。

会 長 今回、就労までつながった事例はないが、今後、この支援事業が定  
着し、社会に出る気持ちが芽生えた方の就労支援につながったときに  
関係団体と連携できればよいと思う。